ISSN 0918-7448

NAI Newsletter No. 9 March 2001

人類学研究所 通信

第9号

Nanzan Anthropological Institute
南山大学人類学研究所
〒466-8673 名古屋市昭和区山里町18
Tel. 052-832-3111 (Ext. 580)
2001年3月20日発行
E-Mail:nuai@ic.nanzan-u.ac.jp

「挨拶」

小谷凱宣

南山大学に赴任してから一年。人類学研究所関係者のご配慮により第二種研究所員として施設を利用させていただけることになり、深く感謝している。

人類学研究所における当面の研究課題は、1980年代から推進している国外アイヌ資料の調査結果のとりまとめと、資料収集の背景についての考察である。まず、調査結果のとりまとめは、一口で言えば、約1万3千点のアイヌ資料についての研究資料(文字情報)と約2万枚のスライド(映像情報)とをあわせて、国外アイヌ・データベースの構築準備をすることである。資料は北米に3千点、西欧に5千5百点、ロシアに4千5百点と分布し、およそ6割強に基本的研究情報が付されている。この背景情報は、アイヌ文化の地域的特質に新たな光を当ててくれると期待している。さらに、このアイヌ・データベースは、国際的共同研究を含む将来のアイヌ研究の基礎になるものである。

アイヌ資料収集の背景について明らかになったことがらは、すべて明治時代の日本における人類学研究の揺籃期におこった歴史的事実である。国外資料は、欧米の医学、植物学、地学、化学、民族学などの自然史学に関連する研究分野で基礎的訓練を受けた人々の手により収集され、東京帝国大学の関係者やジョン・バチェラー師をはじめ、多くの人々が国外からの収集者に援助の手を伸ばしている。狩猟民とアイヌ=コーカソイド仮説に関心をもった欧米研究者の収集活動は注目に値する。

それに対して明治時代の日本では、人類学研究博物館の不在、近代科学受容期における自国内の先住民文化理解の歪み、無銘性を旨とする自文化研究の原則を隣接異民族文化に無批判に適用したことなど、人類学の研究対象にしなければならない歴史的事象が多い。そして、アイヌの伝統的村落生活は第一次大戦頃までに崩壊したが、日本国内ではようやく昭和初頭になってから、主として骨董品・古美術品としてのアイヌ資料収集がはじまったという事実が浮かびあがってくる。

国外アイヌ資料の比較研究を通して、日本の人類学研究史に新しい光を当てること、これが当面の目的といえます。

(南山大学人類学研究所第二種研究所員・南山大学教授)

目次

「挨拶」 …… 小谷凱宣 …… 1
東北の「隠し念仏」と南九州の「隠れ念仏」 …… 門屋光昭 …… 2
南山大学所蔵・小川尚義による台湾原住民諸語資料(訂正と追加) …… 李壬癸 …… 10
人類学研究所 所長日誌 …… 15
研究会・講演会 …… 19
Asian Folklore Studies …… 20
出版物 …… 21
連絡事項 …… 22

◆ 寄稿 ◆

東北の「隠し念仏」と南九州の「隠れ念仏」

門屋　光昭

(盛岡大学文学部教授)

はじめに

岩手県全域や宮城県北部を中心とした東北の「隠し念仏」に対して、鹿児島県や宮崎県・熊本県の一部を中心とした南九州に「隠れ念仏」がある。「隠れ念仏」は、鹿児島藩(薩摩藩)ならびに人吉藩(相良藩)がとった念仏禁制にその発生を見ることができる。そこでは近世初頭から江戸時代を通して、キリシタンと同様に一向宗(浄土真宗)を禁じたので、本山本願寺の指導のもとに「カクレ信仰」となったもので、幕藩体制ばかりか、本願寺体制からも隠れた東北の「隠し念仏」とはかなり様相が異なる。

かつて私は、岩手県全域や宮城県北部の「隠し念仏」を調査し、『隠し念仏』(東京堂出版、1989)をまとめたが、その後も引き続き補充調査を行いながら、「宮城県北の隠し念仏」(『東北民俗』第27輯、東北民俗の会、1993)、1931年の八戸市是川の弾圧を扱った「東北の隠し念仏」(『異端教団』洋泉社、1995)、「隠し念仏と宮沢賢治」(『盛岡大学研究紀要』第13号、1994。後に稿を改めて『鬼と鹿と宮沢賢治』集英社新書、2000に収録)などを発表してきた。だから、その輪郭をほぼ明らかにしたつもりであるが、なお二、三の課題を残していた。例えば、「カクレ信仰」とは何か、あるいは「正統」と「異端」の問題がそれである。また、「隠れ念仏」との比較もある。

1.「隠れ念仏」と「隠し念仏」

1994年10月、鹿児島市で日本民俗学会年会が開催されたとき、正月の来訪神であるトシドンの仮面収集のために下甑島に渡った。折悪しく台風が接近したので、3日間、島に閉じ込められた。これが幸いした。その間、下甑島村立資料館や図書館で隠れ念仏関係の資料を調査できたばかりか、村教育委員会の社会教育課長が、秘密裡に念仏集会をした「かくれがま」と呼ぶ洞穴を案内してくれた。また、島の北西部のとある民家で、隠れキリシタンではないかと思われている「クロ宗」について、かなり突っ込んだ聞き取りをした。さらに学会では、森田清美氏が隠し念仏に関する発表をされたので、若干意見を交換した。鹿児島県立図書館での文献調査と併せると、東北の「隠し念仏」と比較する手がかりをわずかながら得たのである。

1999年12月下旬、念願の鹿児島県川辺郡知覧町と熊本県人吉市とを訪ねた。ミュージアム知覧の特別企画展「薩摩のかくれ念仏－弾圧された一向宗－」(会期、1999年7月15日～2000年1月18日)を見ることが主目的であったが、担当の海江田義広学芸員の御好意で、真宗大谷派鹿児島別院の「隠れ念仏探訪」の展示解説会、佐々木智憲師の「隠れ念仏について」、太藤順誼師の「蓮如上人伝絵の絵解き」を聴講することができた。

展示資料は、「方便法身尊形」「親鸞聖人伝絵」「蓮如上人伝絵」「阿弥陀如来立像」「細布講資料」「燈明講資料」「焼香講資料」「最勝講資料」「西方講資料」「三村講資料」「仏飯講資料」「カヤカベ教資料」「薩摩国諸記」「宗門改帳」「宗門札」「訴人文書」「責め石」など多種にわたっており、詳細な図録によって「隠れ念仏」資料の骨格を把握することができた。加えて、知覧町内にある「立山のかくれがま」を見学し、帰途、人吉市にまわって人吉藩の状況を若干調査した。比較の基礎材料を手に入れたのである。

佐々木師は、隠れ念仏というと「カクレ」のイメージが強いが、弾圧されても念仏の信心に生きた人々のことである。鹿児島藩の宗教政策は、浄土真宗(一向宗)を禁制し、真宗寺院や門徒を許さなかっただけで、仏教は盛んであったし、他に念仏を唱える浄土宗や時宗は認めていた。「お内仏」の前で「正

[表　鹿児島の隠れ念仏と岩手の隠し念仏の比較]

	鹿児島の隠れ念仏	岩手の隠し念仏
名　称	隠れ念仏、隠れ門徒 仏飯講・細布講など講名、カヤカベ	隠し念仏、秘事念仏、御内法・御内証 上幅・渋谷地・八重畑など派名
分　布	鹿児島藩領(鹿児島県・宮崎県) ※人吉藩領(熊本県球磨地方)	仙台藩領(岩手県南・宮城県北)と盛岡藩領(岩手県)・八戸藩領(岩手県北・青森県八戸地方)
起　源	藩による一向宗(真宗)禁制 戦国～江戸時代初頭 慶長2年(1597)一向宗禁止令 ※人吉藩では天文24年(1555)禁令	幕藩による禁制、本願寺側からの提訴 江戸時代中期 宝暦4年(1754)山崎杢左エ門ら処刑
弾　圧	鹿児島藩では恒常的に行う 寛永9年(1632)日向山之口で郷士6人が摘発、持高没収・名跡剥奪の上で移百姓に 天保6年(1853)領内全域で取締り本尊2千幅・門徒14万人を摘発 ※人吉藩では天明2年(1782)山田伝助を処刑など(寛政8年ともいう)	仙台藩・盛岡藩では断続的に行う 宝暦4年(1754)山崎杢左エ門ら処刑磔2人・斬罪3人・流罪3人・遠川際放逐3人など25人が連座 文化13年(1816)八戸領片寄村で2人摘発。盛岡藩から八戸送り。盛岡領南伝法寺村などで摘発 文政8年(1825)盛岡で順証を再逮捕
弾圧理由	肉食妻帯などへの嫌悪 一向一揆などへの恐れ 本山への多額な上納金	切支丹と紛らわしき邪宗 本山を持たない在家念仏の結社・集会 百姓一揆の謀議の場
教　義	一向宗(真宗)の教義 真宗念仏	真宗教義を本とした在家念仏信仰 真宗念仏と真言の秘密念仏の習合
本　尊	お内仏(方便法身尊形、阿弥陀仏像) 親鸞聖人伝絵、蓮如上人伝絵	方便法身尊形、黒仏 (親鸞聖人伝絵、蓮如上人伝絵)
組　織	講組織　講ー講間 本山ー取次ぎー講頭ー門徒 本山から使僧派遣、本尊下付	分派ごとの組織　本部ー地区ー講中 善智識ー導師・脇役・世話人ー信者
行　事	御座、報恩講 現在の細布講では御座(鏡開き、ご奉仕様、虫干し)と報恩講	オトリアゲ・オモトヅケ、お七夜(報恩講)、カイゴウ・オトリコシ 念仏申し(遷化の勤め)
明治以降	真宗寺院が建立され、本山のもとにもどり、講独自の活動は衰退。	存続、分派がますます多くなる。昭和30年代以後、衰退するも継続。
そ の 他	カヤカベ、クロ宗 隠れ念仏での特殊化(カクシ化)	

信偈」「和讃」「お文(御文章)」を読んでおり、現在の門徒の生活規範と何ら変わりがなかった。ただ、集会場近くには立番がいて門徒以外を寄せつけなかったし、いつでも本尊や集会を隠せる状態にしていた。山の中に「かくれがま」もあった、などと語られた。

また、『薩摩国諸記』の1822(文政5)年と1843(天保14)年の記事を引用して藩の取締りの理由を説明された。文政5年の場合は、川内の十八日講で本山に冥加金15両を納め、すでに本尊を持っていたが、1尺5寸の「親鸞聖人・蓮如上人二尊像」の下付を求めた。番役の鮫島善右衛門の家は人通りに面していたので、3地区に分けて10日ずつ本尊などを巡行して集会をしている。夜中で女性や子供が参加できないから、小さな像の下付を願ったもので、親鸞や蓮如の言葉を聞きたいという切実な思いからだった。また、天保年間が最も弾圧が厳しかったが、経済的な理由が大きかった。加茂町で煙草講が本願寺に5か年で50両(?)を納入したという文書が発覚した。藩財政改革の最中、薩摩の金が大量に本願寺に流れたことが分かり、弾圧につながったのだという。

表「鹿児島の隠れ念仏と岩手の隠し念仏の比較」は、以上のような状況を踏まえた上で作成した。発生や弾圧の模様、教義や信仰物、組織や行事、近代以降の衰退と現状などを比較しながら、「カクレ信仰とは」「信仰の正統と異端とは」など、宗教学や宗教史の二、三の問題を検討する手がかりにしたいためである。

2. 比較から見た「隠し念仏」

岩手の「隠し念仏」は、鹿児島で「隠れ念仏」「隠れ門徒」と呼称している念仏信仰と非常によく似ている。ただ、両者とも「カクレ信仰」には違いないが、表で見るごとく、かなりの差異がある。

宮沢賢治は羅須地人協会を設けた花巻郊外の下根子桜で接する信者や指導者を、詩の中で「秘事念仏の弟子」「秘事念仏の大師匠」「秘事念仏の大元締」といい、高村光太郎は同じく花巻郊外の山口で招かれた会合の参加者と指導者を詩の中で「かくしねんぶつ」「部落の同信」「黒ぼとけさま直伝の部落のお知識さま」と呼んだ。

賢治が言った「秘事念仏」は、本願寺から邪義・秘事法門・異安心などと指弾された浄土真宗の異端の一派である。研究者など外部の者は光太郎のように「隠し念仏」と呼ぶが、結社や信徒側では「御内法」「御内証」などと称す。実際には「上幅さん」「渋谷地さん」「桜井さん」と、派名で呼ぶことが多い。鹿児島でも「仏飯講」「細布講」「燈明講」「焼香講」「最勝講」「龍谷講」「西方講」「三村講」のように講名で呼ぶが、それはあくまでも本山本願寺の下での講であり、各派が独立し独自路線をとる「隠し念仏」の各派とはやや形態を異にしている。この点では、カヤカベが岩手の「隠し念仏」に近い。

分布は、「隠し念仏」は岩手県のほぼ全域と宮城県北の一部や青森県八戸地方に及んでおり、旧藩で言えば盛岡領・八戸領・仙台領・一関領である。菅江真澄の紀行『津軽のつと』の1798(寛政10)年1月7日条に「隠し門徒」の記事があるが、これは弘前領青森県東津軽郡平内町の童子のことであった。一方、「隠れ念仏」は鹿児島領の鹿児島県全域と宮崎県日向地方の一部、人吉領の熊本県球磨地方で、甑島三島や南島諸島にも及んでいたから、こちらも南九州の相当な範囲になる。

だが、「カクレ信仰」が生まれた原因には大きな違いがある。「隠れ念仏」の場合は、鹿児島藩、及び人吉藩による一向宗禁制が主因。島津家や相良家の当主ら為政者側は一向宗に対する嫌悪感や恐怖心を抱いていた。親鸞以来の肉食妻帯や神祇諸仏を軽んじ、穢土定離欣求浄土を願う風を嫌い、加賀一向一揆や三河一向一揆、石山本願寺合戦などに大きな恐怖を感じていた。後には本山へ多額な上納金を送っていたことを知り、大弾圧に踏み切っている。一向宗の存在そのものを否定したのである。

「隠し念仏」の場合は、仙台藩や盛岡藩の禁制ばかりか、江戸幕府の宗教政策に大きく関わり、加えて本願寺側の強い糾弾があった。1664(寛文4)年、幕府は諸大名に宗門改役を置くことを布達した。これによって寺請・宗門改め制が全国に普及し、宗教政策が確立していくと、翌1665(寛文5)年の日蓮宗不受不施派弾圧を手始めに、その枠をはみ出す信仰へ容赦のない取り締まりを行うようになった。

1722(享保7)年、築地西本願寺別院から末寺に対して隠れ念仏禁止の掟が出された。異端・異安心への宣戦布告である。1754(宝暦4)年、仙台藩は水

沢で「紛敷邪法」を布教したかどで、山崎李左衛門・長助を磔にしたほか、斬罪3人・流罪3人・遠川際放逐3人など計25人を処罰した。これは東本願寺派(大谷派)仙台触頭の正楽寺と西本願寺派(本願寺派)仙台触頭の称名寺からの提訴を受けて行われたのである。

以後、1755(宝暦5)年京都で西本願寺による隠れ念仏摘発。1767(明和4)年江戸で隠れ念仏摘発。1794(寛政5)年京都で隠れ念仏摘発と続く。いずれも、東・西本願寺が積極的に動いて摘発にこぎつけている。

「隠し念仏」の信仰内容は、真宗の教義を本とした在家念仏信仰ではあるが、真言の秘密念仏と真宗念仏が習合したものと考えられる。各結社の説明では、真宗には僧侶の広める「表法」とは別に、蓮如などを淵源とし、在家方に伝授された「内法」があり、それが京都の鍵屋から伝えられたという。一方、鹿児島の「隠れ念仏」は本願寺の示す真宗教義を守り、真宗念仏を唱えた。

「隠れ念仏」の本尊は、お内仏の「方便法身尊形」という軸装が大半で、「阿弥陀仏木像」もある。「親鸞聖人伝絵」や「蓮如上人伝絵」が本尊、または準ずるものとして扱われている。この点では「隠し念仏」も「方便法身尊形」を本尊とし、「親鸞聖人伝絵」「蓮如上人伝絵」を「お座」などでの絵解きや説教に用いているのと同じであるが、本部教会の本尊を「黒仏」としている派がある。「黒仏」は親鸞自刻像に親鸞の火葬骨灰を塗ったものと説明して、布教活動に用いてきた。

「隠し念仏」は、本山本願寺とつながっていない。秘密結社的色彩が濃いので、地域ごとに独立する傾向が強く、分派は上幅派・水沢派・渋谷地派・八重畑派・紫波派など十数派に及んでいる。その中で、岩手県内に最も広く流布したのが渋谷地派、伝統的格式を保っているのが上幅派、秘密結社的色彩が特に濃いのが八重畑派系の葛巻派である。また、宮城県北地方には栗駒派や築館派がある。

その組織は各派で多少異なるが、最も流布した渋谷地派の場合、本部渋谷地(胆沢町南都田)の下に教区や講中があり、大導師(大センセイ)ー励法員(教区を統括する)ー導師(センセイ)・脇役(オワキ)・世話人ー信者となる。また、伝統的格式を保っている上幅派の場合、本部教会(水沢市佐倉河)をオフモトと呼び、その下に箇所・部落教会があり、知識(上様)ー法老ー願主(御取締役)ー御用人・下役ー信者、知識には補佐する御鍵役・御側役がいる。こうした体制で組織の運営や諸行事を営んでいる。

これに対して、「隠れ念仏」の多数の講は本山本願寺と深くつながっており、地域ごとに独立しようとする傾向はそう強くない。講の大小はあるものの、本山から使僧が派遣されたり、本山に参拝する講の指導者がいたり、本山に本尊の下付を願ったりした。また、隣接する他領内に、本山に冥加金などを取次ぐ者や寺を持っていた。この場合、本山ー取次ぎー講頭ー信者となる。この点では、本山とのつながりを断って、霧島信仰と結びついたカヤカベは全く特殊である。

「隠し念仏」も骨格は浄土系の信仰である。弥陀の本願を信じ、極楽に往生を遂げようとする信仰には違いがないが、真言の秘密念仏でいう「即身成仏」の信仰が習合している。だから、その信心の獲得時に最大の関心を置いている。最も重要な儀式は嬰児の誕生直後に行う「オモトヅケ」と、その子が6・7歳前後から12・13歳頃に行う「オトリアゲ」である。大人が新たに入信する場合にも同様にオトリアゲを行う。

オトリアゲは、オモトヅケとともに、信心を獲得し、即身成仏が決定する儀式である。オモトヅケはすべての派で行っているわけではないが、渋谷地派などでは赤子を誕生後できるだけ早い時期(7日以内が最も良いという)に受けさせる儀式で、導師によって謂わば信心の種を渡すと解釈できる。赤子を抱いた親か祖父母が阿弥陀如来像の前で、子に代わって導師の口跡をまね、弥陀の本願を信ずる誓いをなすのである。

その子が6・7歳前後から12・13歳頃までに行うのがオトリアゲである。導師の指示に従い念仏や「タスケタマエ」を息の続く限り唱え、その相格によって成仏可能か否かが判断される儀式である。もともとは、大人が事前の厳しい審査の後に秘密裏に受けたものだったが、ムラ中がおしなべて加入すると、対象は子供達や他地域からとついだ嫁や婿となった。合格すると、導師から「改悔文」や日常守るべき生活規範、月3回の精進日などが申し渡され、みんなに誓

められ、御馳走がふるまわれる。

一方、「隠れ念仏」は先に触れたように本願寺の示す真宗教義を守り、真宗念仏を唱えたのであるから、こうした即身成仏が決定するとする秘儀などは行われていないし、むしろ異端として強く排除する姿勢を貫いた。

ところで、オトリアゲはその秘儀性のために、あるいは通常の会合も秘密主義なために、性風俗をはじめとする誤解を招き糾弾を受けた。近代になってもこの傾向は続き、昭和8年、青森県八戸市警察署は是川の会合に踏み込み数十人を検挙したのも、風紀を乱すものという理由だった。結局、この事件は事実無根として全員を釈放せざるを得なくなり、最後は賽銭が上がるので詐欺罪の適応が検討された。宮崎県日向地方の「隠れ念仏」を鹿児島藩では「帯解き仏法」として糾弾したことがある。仏法に名を借りた会合で、女が帯を解いて投げかけ引いた男と無差別に交じり合うというのである。直純寺や勝光寺の文書や三浦梅園の「帰山録」にあるという。

オモトヅケとオトリアゲは、キリスト教カトリックの「幼児洗礼」と「堅信礼」との関係によく似ているが、孫祝いや七夜の祝い・名付け・七つ子詣りなど、地域の伝統的な習俗と結びついた通過儀礼的な要素が多分にある。岩手県胆沢郡衣川村の月山神社の「七つ子詣り」、水沢市黒石の黒石寺蘇民祭の「鬼子(七歳児)登り」、青森県三戸郡南部町の「十三歳の月山まいり」など7歳及び13歳は大人への重要なステップだったのである。

次に定例の行事を見ておこう。「隠し念仏」の渋谷地派では地区ごとに講を組織し、そのもとに幾つかの部落講中を置いており、定例に行う法会はその末端の講で行っている。正月8日のオヒモトキ、春のカイゴウ(会合)、秋のオトリコシ(お取越し)、11月22日～28日のオシチヤ(お七夜・報恩講)などがそれである。その勤行は阿弥陀如来を本尊とする仏壇の前で、導師の音頭で親鸞の「正信偈」(浄土信仰を広めたインド・中国・日本の高僧をうたった漢詩)と「和讃」を唱和し、蓮如の「御文章」(蓮如の信者宛の手紙)を聴聞する。オヒモトキは日中、他は夜七時頃から行い、簡単な精進料理で共同飲食して、夜の9時か10時頃解散する。

お七夜は御正忌・報恩講ともいい、浄土真宗の開祖・親鸞の命日(11月28日)に催す報恩感謝の法会である。本山末寺では、命日の1週間前の22日から28日までの間、晨朝法要・日中法要を行う。なお、西本願寺では命日を太陽暦になおし、1月9日から16日まで開いている。浄土真宗の勢力の強い北陸地方などでは、一般在家の人達で「お講」を組織しているが、その最大行事が報恩講である。当番であるヤドに集まって勤行し、盛大な「オトキ(お斎)」と呼ぶ共同飲食を行う。

これと同様に「隠し念仏」の盛んな地域では、各派の末端の講中などが開いている。北上市和賀町岩崎では、夜6時過ぎ当番の家(ヤド)に集まり、阿弥陀如来を本尊とする仏壇の前で、導師の音頭に従い、「正信偈」と「和讃」とを唱和し、導師の奉読する「御文章(お文)」を聴聞する。その後、簡単な精進料理と酒で会食して、夜9時か10時頃、解散する。昔は1週間で講中全戸をまわったので、朝・昼・夜と日に3回行ったという。

その他、渋谷地派では本部の大導師を招いての法座が開かれ、死者が出ると旦那寺の住職による葬儀の一方で、同信同行の講中の人達によるネンブツモウシ(念仏申し)が行われる。謂わば「本音」と「建前」の二重の葬儀が行われているのである。

一方、「隠れ念仏」の場合は、基本的には御座と報恩講とからなる。甑島の灯心講の場合でも本山から行事の催し方について細かな指示があった。行事によっては勤行の中で「正信偈」を何首引きにするかまで示されている。葬儀でも、「一、葬送の次第は棺前にて帰三宝偈と申、俗に十四行偈とも称し候を相勤、葬所にては正信偈御和讃二首引にて、野帰り骨揚の時分は正信偈三首引、白骨の御文章これを相勤めらるべきこと御作法に候。」とある。藩の厳しい取り締まりの中で、番役を立てて警護する秘密の集会場や念仏洞ならまだしも、野辺の送りや墓所での勤行、骨揚げの勤行などを原則通り執行したとは思えない。ここでもあるいは「建前」の葬儀が行われていたのかもしれない。

『眞實に生きる人々ーさつまの「かくれ念佛」ー』によると、知覧町の細布講は明治の半ばを過ぎて真宗寺院が建立されるとともに講員数が徐々に減り、やがて300戸程度となり、戦後は激減して1974年にはついに横井場の19戸だけになった。御座も月に1

度くらいずつ各集落を持ちまわりで開いていたものが、1月の鏡開き、3月のご奉仕様、7月の仏具の虫干しを兼ねた行事の3度だけになったという。

このようにして、明治以降、鹿児島では真宗寺院が建立されるようになり、「隠れ念仏」は本山のもとにもどり、講独自の活動は衰退した。「隠し念仏」が明治から昭和初期まで分派をますます増やし、活発な布教活動を行ったのとは対称的であった。しかし、その「隠し念仏」も戦後の高橋梵仙名誉毀損訴訟(研究者の梵仙氏は京都鍵屋をひそかに継いでいたが、これを知らなかった八重畑派の指導者達が梵仙氏所持の本尊黒仏を偽物などとして攻撃したことに対する名誉毀損訴訟。詳しくは拙稿『隠し念仏』参照)を経て、昭和30年代以後衰退に向かって行った。ただ、多くの派では衰退したものの、現在でも細々と維持されているのである。

ところで、南九州の「隠れ念仏」にも「隠し念仏」的な現象が見られる。霧島山麓の「カヤカベ」と下甑島の「クロ宗」がそれである。別な機会に論ずることとして、ここでは指摘だけにとどめておきたい。

カヤカベは「牧園・横川連盟霧島講」という。茅萱の壁や屋根に本尊を隠し、その壁を拝んでいることからカヤカベと呼ばれた。龍谷大学宗教調査班が行った1962年調査によってほぼ全容が知られるようになった。当時、牧園・横川両町に約300戸の信者があり、表面上は霧島神宮を信仰対象とした。集会は深夜に行われ、部外者の参加を認めず、行事や教義などは秘して他に漏らさなかった。

クロ宗は下甑島村片ノ浦の岡集落に行われている信仰で、一般には隠れキリシタンと見られているが、土着化した念仏信仰であると私は考えている。甑島三島の「隠れ念仏」の講とは一線を画し、独立独歩の姿勢を貫いたものであろう。

おわりに

なぜ、信仰を隠すのであろうか。結論を言えば、隠すしか術がなかったからである。

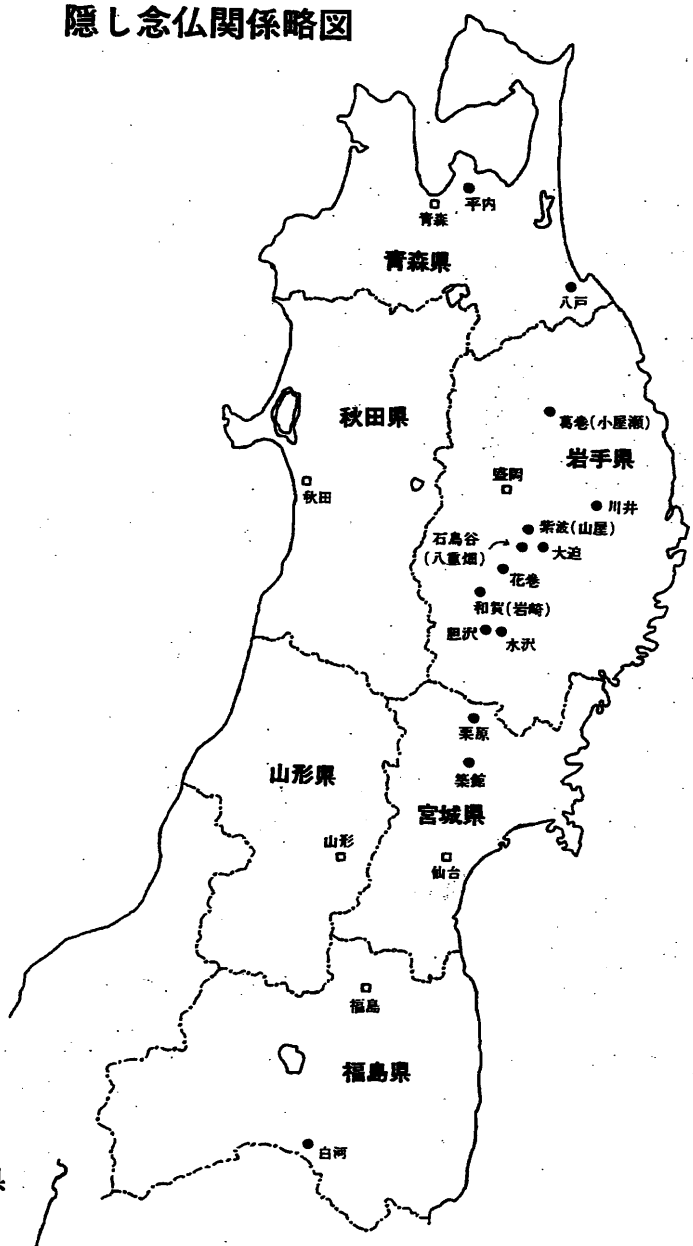
東北の「隠し念仏」は、江戸時代、熾烈に救いを求めた民衆が、苛酷な宗教統制を行う幕藩権力、及びその末端機構に組み込まれて形骸化した仏教寺院から、自らの信仰を守ろうとする、その対処の仕方で「カクレ信仰」となったものである。追いつめられた信者達は地下にもぐり、「カクレ」として信仰を守り続けたのである。一方、南九州の「隠れ念仏」も同様であった。鹿児島藩、及び人吉藩による一向宗(真宗)禁制があり、そこから隠れたのである。

ただ、鹿児島の場合、近代になって「カクス」必要がなくなった。信教解禁が宣言された明治9年以降、真宗寺院が建立されるようになり、「隠れ念仏」は本山のもとにもどって行き、講独自の活動は衰退していったのである。「隠し念仏」が明治から昭和初期まで分派をますます増やし、活発な布教活動を行ったのとは対称的であった。

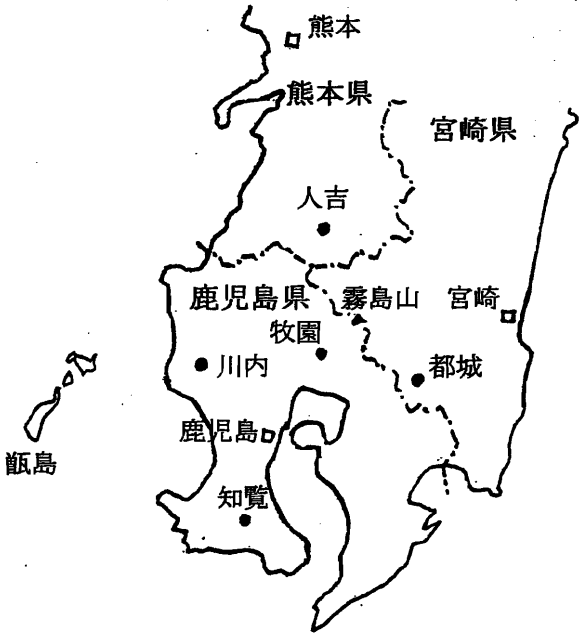
東北では近代になっても「カクレ」の姿勢は続く。そこには、受動的な「カクレ信仰」から能動的な「カクシ信仰」への展開が認められる。そして、その「秘儀性」を教えの深遠さ・真実さに結びつけて説き、弾圧されるから「カクス」のでなく、教えが深遠だから「カクス」ことが要求されたように見える。だが、実際は近代に於いても、昭和初年の青森県八戸市警察署の不当介入のような例は続いたし、本願寺の側からいえば、「秘事法門」「邪義」「異端」であったから、その強大な権力から押された烙印はつきまとい、そこから「カクレ」なければならなかった。

一方、南九州では別なねじれ現象が生まれた。本山とつながりを断っていたカヤカベ、隠れキリシタンと見分けのつかないクロ宗、こうした「隠れ念仏」は、真宗寺院が再興されるようになっても本山にはもどれなかった。だから、「カクレ」から「カクス」姿勢をとらざるを得なかった。南九州の「隠れ念仏」にも「カクシ信仰」、すなわち「隠し念仏」が存在することになったのである。

隠し念仏関係略図



隠れ念仏関係略図



参考文献

星野元貞
1988『薩摩のかくれ門徒』著作社。
門屋光昭
1989『隠し念仏』東京堂出版。
開教百年史編纂委員会
1987『本願寺鹿児島開教百年史』浄土真宗本願寺派鹿児島教区教務所鹿児島別院。
桃園恵真
1980『さつまの「かくれ念仏」』著作社。
ミュージアム知覧
1999『薩摩のかくれ念仏ー弾圧された一向宗ー』（企画展図録）。
龍谷大学宗教調査班
1970『カヤカベーかくれ念仏ー』法蔵館。
真宗大谷派鹿児島別院
1992『眞實に生きる人々ーさつまの「かくれ念仏」ー』真宗大谷派鹿児島別院。
高橋梵仙
1956『かくし念仏考　第一』日本学術振興会。
高橋梵仙
1966『かくし念仏考　第二』日本学術振興会。
高取正男・千葉乗隆・桃園恵真・宮崎円遵
1972「薩摩の真宗禁制とカヤカベ」『日本庶民生活史料集成』第18巻、三一書房。
米村龍治
1979『殉教と民衆ー隠れ念仏考』同朋社。

◆ 調査報告 ◆

南山大学所蔵・小川尚義による台湾原住民諸語資料(訂正と追加)

李壬癸

(台北市中央研究院言語学研究所)

1. 経過報告

昨年『通信』(第8号、2000年)誌上で、李壬癸・土田滋両先生が本学所蔵の小川尚義資料を調査された結果を公表した。しかし、その時には、時間的制約もあり、資料を十分に検討できていない憾みがあった。そのため、李先生は昨年9月に黄秀敏女史と共に来名し、約1週間をかけて資料を再検討された。その結果、前回の報告を何箇所か訂正する必要が生じたため、彼の報告(本年1月3日付)を踏まえて、以下のように加筆・訂正版を掲載することとした。諸言語資料の中には内容がより具体的になったものもあり、殊に小川先生の手稿は実体が一層明確になった。しかし、ここでは、台湾原住民諸語と直接には関係のない資料は割愛させていただいた。

(クネヒト・ペトロ)

2. 小川コレクション中の台湾原住民諸語資料

2.1 平埔族語 (Plains Tribes Languages)

2.1.1 一般 (General)

1. 熟蕃材料 (Plains Tribes Materials)
   1) 高屏言語分布圖(『台灣文化史』より、伊能自身による抜粋)
   2) 『台灣土蠻語集』(伊能の手書きによる『台灣府誌』巻16所載の番語)
   3) 『熟蕃ニ關スル調査』(杉山調査による Siraya 語、カタカナ、11頁)
   4) 『台北平埔蕃變遷一覧』(明治30年、31年調査)
   5) 伊能の「大甲社平埔蕃語」
   6) 小川 Taivoan
   7) 岸裡社(An-li-she)、野村氏記すところの「大水氾濫之歌」「氾濫後人民分居之歌」「開基ノ歌」と注釈
   8) 『埔里社平原ニ於ケル熟蕃分布』
   9) 『各社起因沿革調査』
2. 台灣全島熟蕃統計
3. タイトルが付けられていない小川メモ
   1) 老婢庄交換所物品名ツアリセン語、23字
   2) 奇武茗 (Kiburaw)、里腦 (Linaw)、流流 (Rawraw)、擺厘 (Paili) 及び打馬煙 (Tamayan) の5つのカバラン語方言の、約20語彙項目
   3) 霧社方言とカバラン語比較 (A comparison of Paran Seediq and Kavalan lexical forms)
   4) 宜蘭移民史ニ單語アリ調査ノ事
   5) 宜蘭番歌(?) (A Kavalan or Trobiawan song collected in I-Lan)
   6) 宜蘭口碑(Oral traditions of the villages in I-Lan, all written in Japanese)
   7) 埤仔頭 (Siraya of Pi-a-t'ao village)
   8) 岸裡社 (Several hundred lexical items of Pazeh recorded in An-li-she, from the informant 潘永安)

2.1.2 ファボラン語 (Favorlang)

1. English-Favorlang-IV
   Happart (1650) によるファボラン語ーオランダ語英訳辞書に基づき、小川が英語のアルファベット順に並べ替えたもので、このノートには N から S までが収められている。(A から M まではAA研にあるが、その他のノートの所在は不明である。)
2. ファボラン語南洋語比較 (A comparison of Favorlang and Extra-Formosan Languages)

ファボラン語とフィリピン諸語を比較し、ファボラン語の音変化を述べる。

2.1.3 パゼッヘ語 (Pazeh)

1. パゼッヘ語法材料 (Grammatical Materials of Pazeh)
2. 岸裡社語彙資料 (2.1.1 の 3. (8) 参照)

2.1.4 カバラン語 (Kavalan)

1. カレワン語 (Language data from Kalewan village collected in Hualian)

2.1.5 シラヤ語 (Siraya)

小川の平埔族諸語データの大部分はシラヤ語に関係したものである。いろいろな種類のものがある。

1. 『濱の真砂』五
   新港文書、Lacouperie (1887)、新港文書年代順表、新港文書語彙、新港文書に現れる人名一覧、漢名説明、官印一覧、その他を含む。
2. 『濱の真砂』九[1]
   シラヤ語の文法分析
3. 『番語文書年表』(二種)、『番語文書調査』(一種)
   第一種:明治32(1899)年9月
   第二種:明治32年4月29日
4. 新港文書 ── マタイ福音書に基づいた代名詞研究[2]
5. Siraya とフィリピン語比較研究
6. Siraya affixes
7. 新港文書 ── 分析研究
8. 新港文書、附麻豆文書等
9. 新港文書 (Handwritten copy of two Sinkang manuscripts in Siraya)
10. 新港文書(中文・原件)(An original copy of Sinkang manuscripts in Chinese)
11. 新港文書 (A table listing the dates, place names and abstracts for the Sinkang manuscripts)
12. 善化地圖(大正11年)、台灣日日新報社
13. Vlis 会話
14. 下淡水寄語 (Manuscripts of Lower Tamsui)
15. 『台灣語解』渡邊洪著・基氏譯(シライア語)
16. 「漢語ノナキモノノ意譯」、33 Sinkang manuscripts plus 麻豆 texts 15, 16, 17, 22, 23, 24, 25, 26
17. 'Siraya phonology and reflexes of PAN'

2.2 山地語 "Mountain Tribes" Languages

2.2.1 アタヤル語群 (Atayalic)

2.2.1.1 アタヤル語 (Atayal)

1. Atayal Dialect
2. Tayal I (渡邊榮次郎)
   Japanese-Atayal conversation (カタカナ表記)
3. Tayal IV
4. Tayal V
5. Tayal (渡邊氏調査)
6. アタイヤル語、會話法。角板山(佐佐木達三郎)
7. タイヤル(小川によるタイヤル語の文法分析)
8. タイヤル蕃語集(渡邊?)
9. Tayal, Sadeq, Bunun 音韻調査
10. アタヤル語集のアルファベット順によるカードインデックス
11. Tayal 音韻(音韻變化)

2.2.1.2 セデック語 (Seediq)

1. Sedaq(セーダッカ)會話(林著)
2. 太魯閣語會話(丸井氏原本翻譯、林氏譯)
3. タロコ語調査(小川)
4. タロコ語音韻表(小川)
5. Sajek 語法(小川)
6. タロコ語テキスト、ロードフ社テキスト(霧社ニテ1936年3月)
7. 番俗沿革 ── 北蕃(百瀾社)取調概要、附手繪圖6頁
8. 浅井調査によるデータのセデック語カードインデックス

2.2.2 サイシヤット語 (Saisiyat)

1. 南庄(Nanjuang)熟蕃語彙(カタカナ表記)明治 33 (1900)年6月8日
2. サイシヤット音韻、單語(小川、43頁)

2.2.3 ブヌン語 (Bunun)

1. ブヌン語(木林氏筆記・講師松本、古川、中村、三笠[木原]、過坑[淵上])
2. Vunung (Sibukun)
3. ブヌン口碑傳説(木林新三郎氏所記、中村警部補ノ講習筆記)
4. セブクン蕃語(カタカナ表記)明治30年11月9日
5. ブヌン語彙(昭和3年10月、埔里過坑調査(カト社)

6. ブヌン語彙(カナ表記)

2.2.4 ツォウ語群 (Tsouic)

2.2.4.1 ツォウ語 (Tsou)

1. ツォウ語音韻調査 ── 附接頭接尾辭(達邦[タッパン]社)
2. 南仔腳社(ナマカバン社)
3. ツォウ語比較(ツォウ、サアロア、カナブ)
4. ツォウ語音韻
5. ツォウ(カナ表記)、ツォウ族蕃語集(達邦)
6. 達邦廳ツォウ族蕃語譯集(大正3年1月)

2.2.4.2 サアロア語 (Saaroa)

1. 蕃語集:四社生蕃部(明治30年・小川カード記入昭和2年9月26日)
2. 浅井調査によるサアロア語彙インデックスカード

2.2.4.3 カナブ語 (Kanabu)

1. カナブ語彙インデックスカード

2.2.5 ルカイ語 (Rukai)

1. 主としてタロマク(大南方言)のルカイ語彙インデックスカード

2.2.6 パイワン語 (Paiwan)

1. パイワン語法(小川)
2. パイワン語の発音(小川)
3. パイワン語彙(小川)
4. パイワン語音韻調査(小川)
5. パイワン族蕃語集(太麻里)(吉澤卯之松)
6. パイワン・プユマ音韻調査(小川)
7. パイワン語(山本寅吉)
8. パイワン蕃語集(大場善太郎)
9. パイワン語(小川)
10. パイワン
11. パイワン大場會話文法・昔話(大場)
12. パイワン語研究
13. 高士佛社語調査(牡丹郷高士村)
14. パイワン(小川)
15. パイワン其他比較(小川)
16. Paiwan texts (クナナウ、カカ、大鳥萬、射麻里、トクブン、アパイワン、カピアン)

2.2.7 プユマ語 (Puyuma)

1. プユマ語法調査並びに單語(志波嚴ニツキ調査)
2. プユマ音韻調査表、附パイワン、マレイ其他ト比較
3. プユマ語調査 ── 卑南社、知本社(1930年8月)
4. プユマ語法分析
5. 卑南社語彙第二巻、三巻(第一巻は欠)
6. 卑南語法分析(affixes, particles, imperative, nominative, accusative, instrument, etc.)
7. プユマ語接辞インデックスカード

2.2.8 アミ語 (Amis)

1. アミ語法
2. アミ語テキスト(未發表)。奇密社、太巴塱社
3. 蕃語字彙以外語彙
4. アミ語(識羅社オスンノ話、加納納社)
5. 阿眉、卑南蕃語法材料
6. アミ語インデックスカード

2.2.9 ヤミ語 (Yami)

1. ヤミ語彙(小川)

2.3 その他の資料

2.3.1 小川論文原稿

ほとんどは既発表論文の草稿で、少数の未発表論文原稿を含むが、その価値については明らかではない。その内の二稿(以下の4. と5.)は土田によって発表された(小川1999a、b)。

1. Vocabulary I (小川)(Comparative wordlists of Ata, Sai, Pai, Ruk, Puy & Amis. 27 pages × 4字 = 108字)
2. K, q 比較字表 (Including Formosan, extra-Formosan, including Hawaiian, Easter Island, Tagalog)
3. Paiwan d $^{(1)}$ < r_1 單語比較表
4. 『台灣府志に出でたる蕃語』(小川)
5. 『台灣蕃語の音韻變化』(小川)
6. 講演稿の一部分、舉泰雅與排灣數詞與南洋Tagalog、馬來等比較、以"飼"與"看"爲例、得知蕃語爲印度尼西亞語。
7. "台灣語"原稿一部分、介紹生番及熟蕃、另提及契約文書。
8. 2.3.1.4.『台灣府志に出でたる蕃語』之初稿、毛筆寫的。
9. パイワン語法調査草稿、附語彙草稿(小川手稿)
10. "インドネジヤン音韻比較"
11. "蕃語音韻比較"
12. "數詞材料" (1944 文之稿本・數詞比較表)

13.『台灣各蕃音韻調査』(Tayal, Sed, Bun, 水社, Tso, 四社, 下三社, Tsarisen, Pai, 知本, Ami, Kabalan, Ketangalan, Saiset, Pazeh, Taokas, Bubulan, Babuza, 斗六, 北投, Sideia, Makatau, 四社熟蕃, Yami)
14.『台灣蕃語各族音韻比較』
15. Sound changes in 南洋語 : b > v, d > d, d > j, d > t, d > z, dj > j, g > g, g > j, h > s, i > i, k > (), k > k, l > t, l > d, l > l, l > r, la > o, li > o, li > , ñ > ts, q > k, r > d, r > n, r̥ > ʈ, r > s, r > z)
16. "蕃語傳説集材料"
17. "蕃語數詞、代名詞、南洋語比較"

2.3.2 欧文資料

小川は台湾原住民諸語について書かれた西欧文献にも常に注意を怠らず、手書きでコピーをして研究していた。たとえば次のような文献を含んでいる： Bullock (1874-5), Dempwolff (1938), Lacouperie (1887), Steere (1874), Taylor (1888-9)。

2.3.3 中国語文献

西欧文献ばかりでなく、原住民に関する漢文資料からも、小川は膨大な量をコピーしている。その中には次のような資料が見られる：

1. 「番俗六考」(『台海使槎録』)
2. 『台灣府志』
3. 『鳳山縣志』
4. 『台灣輿圖説略』
5. 『台灣輿圖』(光緒5(1879)年、夏建綸撰)
6. 番曲(『台灣府志』16 抜萃)
7. 雑集(歴史等)
   包含: a. 生番討伐歌
   b. 國語普及状況(大正14年)
   c. 台灣ニ於ケル西班牙人
8. 漢字音比較表 No. 3
9. 方言比較 No. 1

2.3.4 地図

数葉の地図(手書きの地図を含む)がある。ほとんどは今日入手不能のものである。1999年6月の時点では、時間的余裕がなく、詳しく調査することができなかったが、2000年9月の再来日時に調査し直し、以下のものが判明した。

1. 嘉義廳管内全圖
2. 高雄州管内里程圖(比例 100000:1)
3. 彰化辦務署管内地圖(明治33年9月)
4. 新竹州管内蕃地圖(比例 100000:1)(昭和2年4月、警務部理蕃課。ヤミの写真数枚を含む)
5. 台中州(含花蓮港廳)(昭和3年9月)
6. 台灣全圖(昭和3年5月1日、台灣日日新報社)(比例 600000:1)
7. 台灣熟蕃
8. 台南縣管内全圖(明治34年)(比例 130000:1)
9. 高雄州管内蕃地圖(昭和2年8月、警務部理蕃課)(比例 100000:1)
10. 台中州管内蕃地圖(比例 100000:1)
11. Batavia (地圖、Amsterdam 印刷)
12. India, Burma & Ceylon
13. Map of Madras
14. Bagio (碧瑤)

2.3.5 抜刷 (Offprints of Papers or Books by Various Authors at His Time)

1. 「馬來化した梵語と日本化した南洋語」(三吉朋十)(昭和11年、日印協會雑誌 pp. 69-91)
2. 「時局下の高砂族」(警務局理蕃課)
3. 「各地に於キンマの土名上就いて」(藤田安二)
4. 「蕃社戸口」(昭和7年底止)(昭和8年8月・理蕃課)
5. 「樟の語原に就て」(藤田安二)
6. 「樟の蕃名に就いて其の他」(藤田安二・昭和10年)
7. 「キンアとその精油」(藤田安二・昭和11年)
8. 『The New Topical Text Book』(Rev. R. A. Torrey)
9. 『伊豫松山方言集』(岡野久胤)

注

1) 東京外国語大学のAA研では巻一、二、四、六が管理されている。南山大学で巻五と九が発見されたが、巻三、七、八の行方は未だに不明である。
2) 小川のこの研究を知らず、土田は1996年にSirayaの代名詞に関する詳細な研究を発表した。

参考文献

Bullock, T.L.

1874-5 Formosan dialects and their connection with the Malay. *China Review* 3:38-46. Hong Kong.

Dempwolff, Otto

1938 Vergleichende Lautlehre des austronesischen Wortschatzes, 3. Austronesisches Wörterverzeichnis. *Zeitschrift für Eingeborenen-Sprachen* 19.

Happart, Gilbertus

1650 *Woord-boek der Favorlangsche taal, waarin het Favorlangs voor, het Duits achter gestelt is.*

Lacouperie, Terrien de

1887 Formosa notes on MSS., races and languages; including a note on nine Formosa MSS. by E. Colborne Baber. *Journal of the Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland*, New Series 19:413-94, with three plates. London. Also published separately at Hertford (1887). 82 pp.

馬淵東一 (Mabuchi Tôichi)

1945 「故小川尚義先生とインドネシア語研究」『民族学研究』13(2):160-169.『馬淵東一著作集第三巻』再録。

小川尚義 (Ogawa Naoyoshi)

1999a 「台灣府誌に出でたる蕃語」『台灣原住民研究』第4号, 159-86。

1999b 「台湾蕃語の音韻變化」『台灣原住民研究』第4号, 187-92。

Steere, Joseph Beal

1874 [The aborigines of] Formosa. *Journal of the American Geographical Society of New York* 6:302-34. New York.

Taylor, G.

1888-9 Comparative tables of Formosan languages. *China Review* 17:109-11. Hong Kong.

Tsuchida, Shigeru

1982 A comparative vocabulary of Austronesian languages of Sinicized ethnic groups in Taiwan. Part I: West Taiwan. 『東京大学文学部研究報告 7: 語学・文学論文集』pp. 1-166.

1985 Kulon : Yet another Austronesian language in Taiwan? *Bulletin of the Institute of Ethnology, Academia Sinica* 60:1-59.

土田滋 (Tsuchida Shigeru)

1999 「小川尚義の未発表原稿二編」『台灣原住民研究』第4号, 152-58。

Tsuchida, Shigeru, Yukihiro Yamada, and Tsunekazu Moriguchi

1991 『台灣・平埔族の言語資料の整理と分析』東京大学。

[謝辞]小川尚義の資料の存在を大林太良先生にお知らせし、その取り扱いについてご相談してから既に数年がたとうとしています。先生が土田滋にその件を伝えてくださったのが、一連の調査作業のきっかけとなりました。土田滋を始め、台湾の李壬癸と黄秀敏、そして東京外国語大学AA研の豊島正之と三尾裕子の諸先生方には、資料の調査と整理にご尽力いただきました。記して厚く御礼申し上げます。

(クネヒト・ペトロ)

◆ 人類学研究所 所長日誌 (2000年1月～12月) ◆

記録: クネヒト・ペトロ

1/1(土)2000年とは、旧千年紀の最後の年か、又は新千年紀の最初の年か、少々戸惑っている人がいるようだ。そういうことに頓着せず、クネヒトは電話と大学の雑務から逃れて、帰省中の友人宅を利用させてもらい、新年を武蔵野で迎えた。江戸時代の武蔵野開墾にまで遡る歴史を持つ、小平上水本町の稲荷神社の境内で、地元の青年団と一般参拝者と一緒に、午前0時になるのを待ちかねて元朝参りした。お参りの後、お神酒をたっぷりいただき、神社の世話人たちとも色々な話ができ、中々良い気持ちになって部屋に戻った。辰年である。人類学研究所にとって昇り龍の年となるよう祈っている。大学の様々な改組活動の一環として、諸研究所の在り方の見直しも迫られるだろう。また、人類学研究所の叢書を再出発させたい気持ちもあるが、頭だけが大きい文字通り竜頭蛇尾の年にならないよう願って止まない。

1/19(水)本日の所員会議で、新規の長期研究計画と関連して、新しい第二種研究所員として文学部人類学科の小谷凱宣・森部一両教授と文学部の中裕史助教授が選出された。

1/25(火)昨年 Asian Folklore Studies への論文掲載を決めた、オハイオ州 Miami 大学の Assistant Professor である Noriko T. Reider 氏が、雑誌の編集室を訪ねて下さった。短い訪問ではあったが、持参された怪談物語についての論文に関して、直接議論できる貴重な機会であった。

2/12(土)研究所のコピー・エディターである Clark Chilson 氏が、大谷大学で開催された日本民俗宗教研究会で、「潜伏する仏教集団ー真宗秘密講はなぜいまだに隠れつづけるのかー」という演題で、進行中の研究に関する中間報告を行った。Chilson 氏はコピー・エディターとしての勤めの傍ら、英国 Lancaster 大学博士課程の学生として研究活動を続けている。

2/24(木)南山大学文学研究科文化人類学専攻課程の記念すべき日である。考古学専攻の中野智章君は本日学位申請論文に関わる口頭試問に合格した。論文の題名は「古代エジプト第一王朝における王墓地論ーサッカラ墓地の研究を中心にー」であった。中野君は80名ほどの聴衆を前に、研究内容を見事に説明してみせた。

3/18(土)クネヒトは国立民族学博物館で開催された共同研究会「福音と文明化の人類学的研究」(杉本良男代表)に参加した。

3/20(月)大学の卒業式。恒例の行事だが、今回は南山大学の人類学にとっては特別な日である。文学研究科文化人類学専攻課程において待望の博士第一号が正式に誕生したからである。中野智章君である。新博士のこれからの研究活動に大いに期待したい。

3/24(金)宗教文化研究所が創立25周年を祝って記念シンポジウムを開催。夕方、関係者、元研究員、友人など多数が駆けつける中、親睦会を行った。宗教文化研究所は人類学研究所の年下の兄弟だが、より活発に活動をしている。負けないようにしないと…!

3/27(月)午前中に、北海道大学スラブ研究センターの井上紘一教授が来所し、S. M. Shirokogorov 氏関係の資料を探し、調査した。

4/1(土)名古屋の国際会議場にあるセンチュリー・ホールで入学式が行われた。二つの新学部を設置し、2学部を改組した、新しい南山大学のスタートである。新設学部の一つは総合政策学部で、そこに人類学に近い分野の研究をしている教員が何名か所属している。従来の人類学科は人類文化学科に変身して、人類学関係の教員だけを考えると11名の教員で再出発した。新しい学科像に関して長い間続けられてきた議論にもようやく終止符が打たれたが、今度は引き続き大学院と諸研究所の在り方に議論が集中することだろう。宮沢は新設のアジア学科所属となり、早速入試関係の仕事と学科カリキュラムの作業を依頼された。その他、東南アジア史学会中部地区例会委員に選ばれ、ほぼ毎月行われる例会の運営に携わるようになった。Leila

Madge は、昨日日本学術振興会の外国人特別研究員として再来日した。本日より、研究所の客員研究所員の身分で15か月間滞在し、その間、羽仁もと子の「自由学園」の理念と在り方を研究し、名古屋の「婦人の友の会」の本部等で参与的観察調査を行う。

4/3（月）クネヒトはボストンに向けて出発した。American Academy of the Arts and Sciences 主催のシンポジウム "Expanding notions of God" (4/1～9)に出席し、発表するよう招聘された。大変 intensive な議論に富んだ小規模なシンポジウムで、"God"とか"religion"などの概念を考えようとする新しい試みであった。これらの概念が、ユダヤ・キリスト教的色彩が強いということを認識した上で、なおかつその概念を、より柔軟に解釈しようとしている試みは明白であった。実に示唆に富んだシンポジウムであった。

4/12（水）2000年度の第1回所員会議を開催した。新長期プロジェクト（仮題「市場」）の発足に向けて企画される準備作業が、担当者の宮沢によって説明された。さらに、研究所主催の公開講演シリーズの題名「日本のもう一つの顔ー知られざる神秘ー」が発表された。数々の問題を乗り越えて、本年度から中部人類学談話会の名簿管理と案内発送の業務を人類学研究所で引き受けることとなった。

4/15（木）Lancaster 大学の Ian Reader 教授が来所された。Chilson 氏の博士論文の advisor で、時間をかけて相談に乗って下さった。先はまだ長いが、これまでの成果を認めてもらった Chilson 氏はひとまずほっとしたようである。

4/13（土）日本民族学会の新旧理事会合同会に出席して、クネヒトは理事としての任期を全うした。かなりの負担を強いられたが、学会という視点でものを考える良い機会であった。また、人類学の仲間と語らうひとときが持てたことも貴重な経験であった。

4/18（火）驚き！　実現不可能だと思っていたことが実現した。本日、科学研究費補助金の申請が採択されたという通知が届いた。この結果、クネヒトと共に中部大学国際関係学部の畑中幸子教授と黄強助教授は、今年度から4年間中国でフィールドワークを行う機会を得た。大学の役職に就いているクネヒトにとっては少々きついことではあるが、研究計画を成功に導くべく努力したいと思う。研究課題は、「中国東北部におけるアルタイ語族の諸民族のシャーマニズムと社会に関する人類学研究」である。

4/21（金）小谷凱宣教授の紹介で、オランダの Groningen 大学教授、Dr. Tjeerd de Graaf が来所された。国際交流基金の客員研究員として来日中の教授は、"Linguistic Databases and Minority Cultures around the North Pacific Rim" という演題で懇話会の講師を務めて下さった。多数の言語を習得されている教授の少数民族言語保存についての話は興味深いものであった。

5/15（月）パリの極東学院の Anne Marie Bouchy 女史が来所され、現在携わっている国際的な研究活動について話して下さった。

5/20（土）～21（日）クネヒトは、国立市の一橋大学で開催された第34回研究大会に出席した。大会の総会で会長の交代があり、それをもってクネヒトの理事としての任務も正式に終わりを告げた。お茶の水女子大学の波平恵美子教授が新会長として就任した。

5/25（木）クネヒトは再び上京し、パリの極東学院主催のシンポジウム「アジア学の展望」の初日のセッションと懇親会に出席した。

5/26（金）クネヒトは、小谷凱宣教授と共に名鉄グランドホテルで開催された、野外民族博物館リトルワールドの評議会に出席した。

5/29（月）南山大学の研究所見直し作業との関連で、人類学研究所、宗教文化研究所、社会倫理研究所は合同で、教務担当副学長岡部朗一教授を迎えて懇談会を行った。3研究所の特色と違いとが初めてわかったというのが副学長の感想であった。できるだけ早い時期に、大学の全体的、かつ基本的展望（ヴィジョン）を明確に打ち出してほしい旨、副学長に要請した。

6/3（土）～4（日）宮沢は、立教大学で開催された東南アジア史学会に出席するため上京した。

6/7（水）Notre Dame 大学教授、Michael Brownstein が来所した。Sabbatical の一部を当研究所で過ごし、帰国前に京都で狂言の研修会に参加する予定である。

6/10（土）公開講演のシリーズがようやく実現の運び

となった。国際日本文化研究センターの小松和彦教授が、「「いざなぎ流」とはなにか」と題して講演して下さった。ビデオを用い村人の生活環境と連関させながら、この呪術行為についてわかりやすく説明して下さった。35名の出席者も満足し、講演後の懇親会で講師と直接話す機会を得た学生も大いに喜んでいた。

6/30(金)クネヒトが研究代表者としてサントリー文化財団に申請した助成金の採択が決定した。研究題目は、俗に言う「虫の会」(構成員は、国文学の美濃部重克教授、辻本裕成助教授、心理学の長谷川雅雄教授と文化人類学のクネヒト)が昨年度から進めている、「日本の「虫」観・「虫」像ー心理的・文化的事象としての「虫」についての学際的研究ー」である。

7/8(土)昼頃、パリで発行されている雑誌 Péninsule の責任編集者 Marie-Sybille de Vienne と Jacques Népote が来所して、Asian Folklore Studies との交換について相談し、決定を見た。午後には、盛岡大学文学部教授であり「鬼の館」館長である門屋光昭氏が、第2回の公開講演で「東北の隠し念仏」と題してお話ししてくださった。東北の隠し念仏を九州の隠れ念仏と比較しながら、この信仰の特色と信徒たちの生活を明らかにしてくださった。東北の一村を長期間調査しているクネヒトにとっては、非常に参考となる話であったが、多数の質問があったことからも、出席者の関心の高さが窺えた。(本号の寄稿を参考されたい。)

7/25(火)University of California、Irvine の Ph. D. candidate である Jonah Tzong-Hong Lin 氏が、人類文化学科の斉藤衛教授の紹介で来所した。今秋、約2か月間研究所に滞在する件について打合せをした。

8/1(火)1か月の予定で、宮沢がベトナムへ出発した。バクニン省の農村調査、そして研究計画の準備として市場調査を行う予定である。

8/2(水)約1か月の休暇を過ごすためにクネヒトは帰省した。5日(土)にはドイツの Leipzig へ旅行して、民族博物館で中国東北地方の専門家である Dr. Ingo Nentwig と Dr. Mareile Flitsch に会って、着手しようとしているこの地方での調査について相談をした。Flitsch 女史が持参した自家製のケーキをご馳走になりながら、示唆に富んだ数々の助言を得た。

9/1(金)クネヒトは興奮を抑えきれないままに、初の「海外調査」のために中国へ向けて旅立った。北京で先ず畑中幸子氏と黄強氏と落ち合い、3日(日)に黄氏と上海社会科学院の王宏剛研究員と共に第一調査地、長春市へ飛んだ。7日(木)に北京経由で内蒙古の海拉爾市へと向かって現地の研究協力者の杜道尓基氏と合流した。13日(水)に北京に戻って畑中氏と合流し、中部大学元教授の金先生と畑中氏の通訳を務めていた思君も交えて、文字通りの北京ダックを堪能し、翌日日本に帰国した。

9/20(水)2日間の予定で、クネヒトと「虫の会」のメンバーは、京都大学の富士川文庫を訪ね、古い文献を調査した。病因としての「虫」に関して興味深い資料を入手することができた。

9/24(土)台北から李壬癸先生と黄秀敏女史が到着した。昨年一通り整理をした小川尚義資料を再調査するのが今回の目的である。1週間毎日研究所で資料の検討を行い、30日(金)に帰国の途に就いた。

9/30(土)中部人類学談話会の例会で、黄強氏とクネヒトは、中国で行ったシャーマンの予備調査について報告をした。中々の手応えが感じられた。

10/1(日)夜、Jonah Tzong-Hong Lin 氏が来名した。2か月間研究所で、博士論文を仕上げ、その試問の準備をするのが主な目的である。深夜12時頃まで研究所に滞在する仲間が、また1人増えた。

10/11(水)Michael Brownstein が再び来所した。今回は約1か月間研究所で文献を読み、著作の準備をしたいと言う。研究対象は近松門左衛門の世話物と西国の観音巡礼の歴史である。11月13日(月)に帰国予定である。

10/21(土)慶應義塾大学文学部の鈴木正崇教授が、第3回の公開講演で「神楽の諸相」と題してお話ししてくださった。神楽の様々な意味についてのお話でとてもためになった。しかし、講演も後半戦ともなると出席者の出足も鈍り、とても残念であった。「関心を持って聞いてくれる人なら少人数でもいい」と先生がおっしゃって下さったのがせめてもの慰めであったが…。

11/2(木)人類学研究所の出版活動がようやく加速されることとなった。発行は来年度まで待たねばならないが、本日クネヒトは出版社の方と打合せをし、来春刊

行の見通しが視野に入ってきた。

11/11(土)ドイツなどでは、今日から謝肉祭の諸行事が始まるが、こちらでは今年度の公開講演の最終回を迎えることとなった。駒澤大学文学部の池上良正教授が、「近代日本の初期キリスト教「聖霊派」について―いやし・霊体験・電信員伝道―」と題して盛り沢山のお話をして下さった。細かい事例と資料を用いながら説明して下さったので、限られた時間内ではあったが日本人の宗教観の様々な側面に触れることができた。「聖霊運動」の在り方を、日本の宗教を通して見つめ直す池上氏の視座は大変示唆に富んでいた。殊に日本人の信仰の中で「霊」が果たした役割については、再考を促された。

11/16(木)進行中の調査でお世話になっている「婦人の友の会」の南山方面家事家計講習会で、Leila Madge は協力していただいているお返しに「友の会と私」という演題で講話を行った。

11/17(金)American Anthropological Association の研究大学に参加するため、Leila Madge は渡米し、"The Public Face of Anthropology"分科会に出席した。

11/21(火)「裁判所に行かなければならない」と言うと余りいい感じはしない。今日からクネヒトは名古屋地方裁判所で、また通訳を務めることとなった。今回は民事事件のため拘置所に赴く必要がないので、幾らか気は楽である。但し、フランス語に訳さなければならないので大いに緊張を強いられた。しかし、考えてみると、裁判とは人類学者にとって存外興味深い世界ではないだろうか。訴訟の当事者にとっては聞き捨てならない話かもしれないが…。

11/27(月)「虫の会」を代表して、クネヒトがサントリー学芸賞の贈呈式に出席するため上京した。その機会を利用して、上智大学で Monumenta Nipponica の編集者と雑誌の編集等について相談し、意見交換をすることができた。

12/2(土)宮沢は、広島大学で行われる東南アジア史学会の研究大会に出席する目的で西に向かって出発した。一方クネヒトは、中日文化センターで、中西進先生が企画担当している「日本文化を考える:日本人はどう癒されてきたか」というセミナーの最終回に、「聖なる空間と信仰」について講演を行った。伊勢参り、参詣曼荼羅とサンチャゴ・デ・コンポステーラへの巡礼について話をした。

12/8(金)南山大学大学院外国語学研究科日本語教育専攻と共催で、小規模な講演会を開催した。Jonah Tzong-Hong Lin 氏が "Arguments, Light Verbs, and the Typology of Phrase Structure" と題して、博士申請論文のテーマに関して発表した。先月取得したばかりの博士号にふさわしい、良くまとまったプレゼンテーションであった。1年の良い締め括りとなった。

研究所の諸活動

◆ 研究会 ◆

第7期研究計画(特定研究)の準備作業

仮題:「市場について」
担当:宮沢千尋

◆ 懇談会 ◆

第一回

日時:2000年4月21日(金)16:30～18:30
場所:研究所2階談話室
講師:Dr. Tjeerd De Graaf
(University of Groningen, Faculty of Arts, Department of Linguistics, 千葉大学文学部客員研究員)
演題:"Linguistic Databases and Minority Cultures around the North Pacific Rim"

第二回

日時:2000年12月8日(金)16:15～17:45
場所:研究所1階会議室
講師:Jonah Tzong-Hong Ling, Ph. D.
(University of California, Irvine, 南山大学人類学研究所客員研究所員)
演題:"Arguments, Light Verbs, and the Typology of Phrase Structure"
(注:南山大学大学院外国語学研究科日本語教育専攻と共催)

◆ 公開講演 ◆

シリーズ「日本のもう一つの顔ー知られざる神秘ー」

第一回

日時:2000年6月10日(土)14:00～16:00
場所:南山大学E棟 E11教室
講師:小松和彦氏
(国際日本文化研究センター教授)
演題:「「いざなぎ流」とはなにか」

第二回

日時:2000年7月8日(土)14:00～16:30
場所:南山大学E棟 E11教室
講師:門屋光昭氏
(盛岡大学文学部教授、「鬼の館」館長)
演題:「東北の隠し念仏」

第三回

日時:2000年10月21日(土)14:00～16:30
場所:南山大学E棟 E11教室
講師:鈴木正崇氏
(慶應義塾大学文学部教授)
演題:「神楽の諸相」

第四回

日時:2000年11月11日(土)14:00～16:30
場所:南山大学E棟 E12教室
講師:池上良正氏
(駒澤大学文学部教授)
演題:「近代日本の初期キリスト教「聖霊派」について
ーいやし・霊体験・電信員伝道ー」

◆ 出版活動 ◆

宮沢千尋

- 「農業行政組織と農業合作社」白石昌也編著『ベトナムの国家機密』、269-94、明石書店、2000年5月
- 「ベトナム北部の父系出自・外族・同姓結合」吉原和男、鈴木正崇、末成道雄編『<血縁>の再構築』、185-212、風響社、2000年11月

クネヒト・ペトロ

- 「心を飛ぶ虫・心に這う虫ー日本の「虫」観・「虫」像ー」『アカデミア』人文・社会科学編第71号、2000年3月、337-89(美濃部重克、長谷川雅雄、辻本裕成共著)
- 「<伊勢参詣曼荼羅>に思う」『瑞垣』186、2000年、21-27

ASIAN FOLKLORE STUDIES

◆ VOLUME LIX-1 (2000) ◆

ARTICLES

Toothless Ancestors, Felicitous Descendants: The Rite of Secondary Burial in South Taiwan (Timothy Y. Tsu)

KaaLiyaaTTam: The Life History of a Performer and the Development of a Performing Art (Aru. Ramanathan)

Elegiac *Chand* and *Duha* in Charani Lore (Jhaverchand Meghani)

The Bone Motif and Lambs in the Turkish Folktale "The Reed Door" (Sükriye Ruhi)

The Lapidary Sky over Japan (Peter Metevelis)

Traditional law of the Ede (Ngo Duc Thinh)

RESEARCH MATERIAL

Thirty Korku Dancing Songs (Stephen Fuchs)

OBITUARIES

Stephen Fuchs SVD (1908-2000): Founder of the Institute of Indian Culture (S. M. Michael)

In Memory of Wang Xiaotang (1918-2000) (Vibeke Børdahl)

◆ VOLUME LIX-2 (2000) ◆

ARTICLES

Holy Cow! The Apotheosis of Zebu, or Why the Cow is Sacred in Hinduism (Frank J. Korom)

The Oral and Ritual Culture of Chinese Women: The Bridal Lamentations of Nanhui (Anne McLaren and Chen Qinjian)

The Annual Round of Agricultural Tasks in Dongyang County: Synoptic Illusion or Symbolic Capital? (Gene Cooper)

The Appeal of *kaidan*, Tales of the Strange (Noriko T. Reider)

OBITUARY
Miyata Noboru: The Folklorist and His Scholarship. Watching the Tide, Knowing the Time
(Shintani Takanori)
REVIEW ARTICLE
Religion, Gender, and Okinawan Studies (Kawahashi Noriko)

雑誌 Asian Folklore Studies の購入等に関するご連絡は下記までお願いします。なお、年間の購読料は¥6, 000 円(団体)と¥3, 000 円(個人)となっています。

連絡先
〒466-8673 名古屋氏昭和区山里町 18
Asian Folklore Studies 編集室
TEL: (052)832-3111(南山大学代表)
FAX: (052)833-6157

研究所発行刊行物

人類学研究所紀要

No. 1	¥500
No. 2	¥500
No. 3	¥500
No. 4	¥500
No. 5	¥1,000
No. 7	¥1,000
No. 8	¥1,300

南山大学選書

1. アフリカの矮小民族	¥2,000
2. 母権	¥2,500
3. アイヌ文献目録	¥1,000
4. W.シュミット記念論文集	¥3,500

人類学研究所叢書

1. 伝統宗教と民間信仰(S57)	¥2,500
2. 宗教的統合の諸相(S60)	¥2,500
4. 伝統宗教と知識(H3)	¥2,800
5. 宗教・民族・伝統:イデオロギー論的考察(H7)	¥2,800
6. アジア移民のエスニシティと宗教(近刊)	(未定)

【連絡事項】

Anthropology of Japan in Japan (AJJ) について

別府春海先生から以下のようなお知らせが届いていますので掲載いたします。

AJJ (Anthropology of Japan in Japan) は日本研究を専攻とする在日人類学者、民俗学者、民族学者を中心とするグループです。1998 年に発足し、年一回研究発表会を開催してきました。昨年までは在日外国人が大半でしたが、日本人の人類学者、民俗学者、民族学者との交流を強めたいという切なる要望により、今年は日本人にも広く呼びかけることになりました。今年は国立民族学博物館で、5 月 12 日～13 日に民博と共催で行うことになりました。日本研究に関する研究発表であれば、特にテーマの限定はありません。発表用語は英語といたします。

入会手続き、その他の詳細につきましては以下の方にご連絡ください。

Brian McVeigh　E-mail: bmcveigh@gol.com
TEL/FAX: (03)3826-2490